

ウ 本山と聖地に見る歴史的風致

このように京都において行われてきた「本山まいり」や「巡礼」は、今なお人々の心のよりどころと安らぎを求める活動として残り、その核となる寺社や名所とその周囲に形成されてきた門前町の営み、信仰の対象として守られてきた森林とそこで行われる人々の活動がそれぞれ固有の世界を形成している。

そして、それぞれの地域は名所見物を兼ねた信仰の旅により、都市構造として結びき、また、参詣という営みを行う人や修行のため京都を訪れる人々の営みが宗教関連の工芸品をはじめ、参詣客が求める伝統工芸品の販売、それらを作る人々の生業に結びつき、様々な道をたどって京都のまち全体に還元されるといういわゆる宗教都市としての様相を形成している。

今日でも京都の歴史的な町並みのどこかで、どこからともなく現れた托鉢僧たくはつそうの読経の声を聞くことができ、行き交う袈裟姿のお坊さんを見かけることができる。また、門前で造られている伝統工芸品の中に、京都で培われてきた伝統の技を見る。

信仰の場である寺院やそれを取り巻く地域、そしてこれらに関連する伝統産業が、京都の歴史の中で重要な地位をしめ、現在も文化の担い手の一つとして京都が代表的な宗教都市としての位置づけを持つ都市であることを日々感じることができる。

(2) 祈りの場

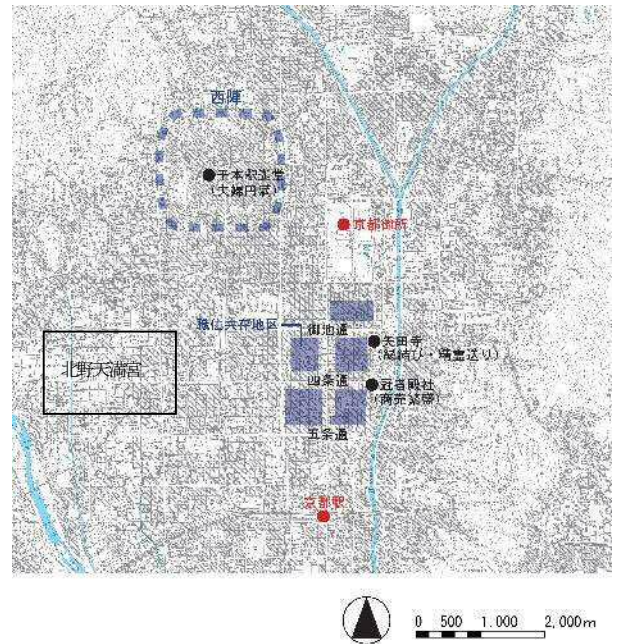


図2-7 祈りの場(例示)

京都には、(1)で示したような寺社の他にも商売繁盛のご利益で有名な毘沙門堂や神経痛・腰痛平癒へいゆの善峰寺、方除けの城南宮をはじめ、冠者殿社かんじゃでんしゃ、大報恩寺(千本釈迦堂)などのように、古くから市民生活と密接な関係をもち、町の人々の信仰を集めた庶民の寺社ともいえる地域の寺社がある。ここでは、これらの生活に溶け込んだ寺社で行われる信仰活動によって形成される歴史的風致を、生業や日々の暮らしという視点を例として示していく。

ア 具体事例

祇園祭の際に神輿みこしが渡御し、還幸まで留まる場所で知られる祇園八坂神社の御旅所の横に並んで、小さな祠が鎮座している。その祠が冠者殿社かんじゃでんしゃと言われ、商売の神様として信仰を集めてきた。かつては烏丸高辻にあった八坂神社大政所御旅所に鎮座していたが、天正年間に、万寿寺通り高倉で今は地名として残る官社殿町に遷され、さらに慶長年間に今の地に遷されたと言われている。

江戸時代には、陰暦10月20日に「誓文払い」とか「えびす講」と称し、商人や芸妓がここに参詣するのがならわしであったようで、近世の資料(日次紀事)に冠者殿が信仰を集めるに至ったわけが記されている。すなわち、「源頼朝の家臣であった土佐坊昌俊が頼朝の命を受け、義経成敗のため入京する。義経は土佐坊昌俊を招いて、何のための入京か問い